

令和6年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立輪島高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	判定基準	成果・課題・改善策
<p>1 学びがあり進路実現できる学校</p> <p>①教育委員会との連携のもと、2次避難している生徒の学習環境を整備する。</p> <p>②「コア輪島」「夢道場」などの自主学習活動を通して、生徒が主体的かつ発展的に学ぶ姿勢を育成する。</p> <p>③教員の教科指導力を高め、3年間を見通した組織的な教科指導と進路指導の実践を図る。</p>	<p>*GIGA スクール校内研修 *探究型学習の授業研究 (オンデマンド研修も活用)</p> <p>*相互授業参観 *ICT 機器利活用研修会</p> <p>*コア輪島、生徒間の学び *スタサポの振り返り *大学模擬授業や学校説明会の実施</p>	<p>ICT 機器を利活用した探究型授業を実施し、その研究や改善のための取組や研修会に参加した教員の割合が</p> <p>A : 80%以上 B : 60%以上 C : 30%以上 D : 30%未満</p> <p>模擬試験で英国数総合の平均偏差値45～50の層にいる生徒が偏差値50を超えることができた割合が</p> <p>A : 50%以上 B : 30%以上 C : 10%以上 D : 10%未満</p>	<p>90%</p> <p>A</p> <p>1年生 44%</p> <p>B</p> <p>2年生 20%</p> <p>C</p>	<p>成果: 学校外で実施されている各種研修に参加する教員が増加しており、教員それぞれの授業改善の意識が徐々に高まっていると思われる。</p> <p>課題: 各種研修会で得た知識や技術を校内の他の教員へ還元し、学校全体の授業力を向上させるための取り組みが十分ではない。</p> <p>改善策: 研修会等が開催された後の適切な時期に、校内で年間2回程度校内研修会・情報交換会を実施する。</p> <p>成果: 1年生では9名中4名が、2年生では15名中3名が7月模試偏差値45～50の層から1月模試偏差値50以上となった。</p> <p>課題: 上級学年での成績の維持・向上させるための方策が必要である。</p> <p>改善策: 1年生で成績が向上した生徒で、2年生で下降することが多い。普段の授業を大切にするように指導する。また、高校卒業までや進路についてイメージさせ、必要に応じて学習に対する取り組み方や家庭学習時間、生活習慣を見直すように面談を通して指導していく。</p>
<p>学校関係者評価委員の評価</p>	<p>・1年次では成績が向上しているが、2年次では成績が下降気味となっている。その原因を分析し、改善に努めること。</p>			
<p>評価結果を踏まえた今後の改善策</p>	<p>・例年の傾向であるが、震災での学習環境の大きな変化も一因だと考えられる。春季休業中の学習をしっかりとさせることが課題であり、その学習の指導方法等の工夫を図っていく。</p>			

令和6年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立輪島高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	判定基準	成果・課題・改善策
<p>2 人間力を向上できる学校</p> <p>①「部活道」については、活動場所や活動内容に創意工夫を加えながらできることから実施し、順次拡大していく。</p> <p>②学校行事を通して、他者を思いやりよりよい人間関係を築こうとする心を育成する。</p> <p>③地域、NPO法人、大学などとの連携を強化し、多様な人々と協働して課題解決を図る姿勢を育成する。</p>	<p>*部活動、ボランティア *球技大会、文化祭</p>	<p>部活動や学校行事が自己効力感を高めるための指導になっており、生徒の主体性が高まったと感じる教員の割合が</p> <p>A：80%以上 B：70%以上 C：50%以上 D：50%以下</p>	<p>90%</p> <p>A</p>	<p>成果：部活動においては、施設・設備に厳しい制約がある中、顧問の工夫により、生徒の成長の場面を担保することができた。 学校行事においては、生徒会執行部を中心とし、何であればできるかを考え、新しいことに挑戦することができた。 課題：持続可能な部活動・行事運営が求められるが、震災の直後だからこそ、支出できた費用や得られた支援・協力があつた。 改善策：行事運営について、内容を特に精選して計画・運営していく。その際、運営の都合で一方向的に教員が精選するのではなく、生徒会執行部が中心となり、生徒一人一人が自己表現できる行事を考える。</p>
	<p>*地域と連携事業 *PTA・同窓会との連携</p>	<p>地域の活動に参加した際に自分の役割を考え、主体的に行動できたと感じる生徒の割合が、</p> <p>A：80%以上 B：70%以上 C：50%以上 D：50%以下</p>	<p>80%</p> <p>A</p>	<p>成果：探究活動や震災復興等に関わり、故郷の将来を積極的に考え始めている。また、PTA活動への協力者数も増え、全員参加型PTAが着実に実動しつつある。生徒たちは他者の関わりから自己有用感を得ることができた。 課題：行事や活動が増える毎に、生徒たちの取り組みの姿勢が受け身になり、生徒一人一人の個人差が大きくなりつつある。PTA活動についても、震災により取り組み自体が減少しているという現実がある。 改善策：生徒が今後得るべき資質能力について、外部機関と共通理解を持ちながら細やかに調整していく力が必要である。PTA活動では全員参加型の取り組み推進のため、役員との連携を強めていく。</p>
<p>学校関係者評価委員の評価</p>	<p>・ボランティア精神を育むことは人間力育成につながる。震災経験から、他者と協力しながら物事に取り組む姿勢を学んだのではないかと感じている。</p>			
<p>評価結果を踏まえた今後の改善策</p>	<p>・生徒たちは様々な被災地の高校生や地域の人々との交流を通じ、今後、問題が生じた際には自分たちが進んで取り組むことが大切だという意識が芽生えている。今後も、そのような意識を育むように取り組んでいきたい。</p>			

令和6年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立輪島高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	判定基準	成果・課題・改善策
<p>3 地域と共に成長できる学校</p> <p>①「WAJI 活」を「ふるさと創生」に特化した取組として充実させ、地域貢献意識の向上と実践力の育成を図る。</p> <p>② 輪島市主導の「高校魅力化プロジェクト」との連携により、将来にわたり地域を支えていく人材を育成する。</p> <p>③小中学校との生徒間交流事業や教員研修、各種団体との連携を通して、「オール輪島」で生徒を育てる。</p>	<p>*WAJI 活 *輪高生による街づくりプロジェクト *課題解決型学習</p> <p>*相互授業参観 *教科間交流 *研究授業と研究協議会</p>	<p>「WAJI 活」を通して、自己有用感が高まったと感じる生徒の割合が、</p> <p>A：75%以上 B：60%以上 C：50%以上 D：50%未満</p> <p>校種間での相互授業参観や教科間交流等に参加した教員が</p> <p>A：90%以上 B：70%以上 C：50%以上 D：50%未満</p>	<p>71%</p> <p>B</p> <p>65%</p> <p>C</p>	<p>成果：街づくりプロジェクト（街プロ）の中心となった2年生では、85.7%の生徒が「自己有用感が高まった」と感じている。特に外部と連携したり校外で活動したりした生徒はその実感が大きいことが、アンケート結果からうかがえる。また、中間発表や振り返りにおいて1・2年生の連携を図ることもできた。</p> <p>課題：想定以上に生徒が外部と繋がる場面が多く、学校として外部団体等への配慮に欠ける面があった。</p> <p>改善策：WEB サイトや SNS での発信を通じて本校の取組の周知を図り、校外での活動を行いやすくする。</p> <p>成果：初任者、3・6年目研修の研究授業に一定数の教員が参観できた。</p> <p>課題：震災の影響から他校種との相互授業参観ができなかった。教科間交流をねらいとした他教科の授業参観を促したが、全教員に浸透できなかった。</p> <p>改善策：より一層教科間の連携を進めSTEAM教育の充実を図り、教科横断型の授業を推進する。</p>
<p>学校関係者評価委員の評価</p>	<p>・大学進学など、単なる高校卒業後の短期的な進路目標ではなく、社会人となった時にどのような資質能力が必要なのかも含めて、より長期的な視野を持って進路実現を考えていく力を養ってほしい。</p>			
<p>評価結果を踏まえた今後の改善策</p>	<p>・探究活動を通して新たな知識を身につけてそれを活かしていくのではなく、複雑な課題に取り組む過程を通して新たな知識を身につけてきている。今後も取り組みを継続していく。</p>			

令和6年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立輪島高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	判定基準	成果・課題・改善策
<p>4 多忙化改善を積極的に実現できる学校</p> <p>①被災環境の中、すべての行事についてその意義や効果を見直した上で、再開・廃止・変更などを検討し、業務の効率化と最適化を図る。</p> <p>②教員の日常生活の再開と維持に向けて、生活環境の整備を行政等に働きかけ、ワークライフバランスの充実を果たす。</p> <p>③生徒、教職員とともに時間管理や健康管理などセルフマネジメントに対する意識を高め、効率性向上に努める。</p>	<p>*行事の精選・省力化 *定時退校日の設定 *主任等ミーティング</p>	<p>教員自身が自己の役割を認識し主任を中心とした業務を進めていると感じる教員の割合が</p> <p>A：90%以上 B：70%以上 C：50%以上 D：50%未満</p>	<p>77% B</p>	<p>成果：様々な制限のある中、学校行事や教室移動等、通常業務に加えて臨時的な業務も主任を中心とした協力体制で進められた。</p> <p>課題：第1回アンケート(92%・A)より評価が低下した。教員個々は十分役割を果たしているが、主任を中心とした業務の意識づけが不足した。</p> <p>改善策：主任等がミーティングにおいて各教員から学校運営に関して積極的な意見を求めるとともに、課員への連絡調整を行う。</p>
	<p>*毎朝の登校指導 *挨拶運動 *チャイムの停止</p>	<p>生徒の不注意による遅刻「0」の日数が年間を通して</p> <p>A：100日以上 B：90日以上 C：80日以上 D：80日未満</p>	<p>98日 B</p>	<p>成果：チャイム廃止で、生徒自らが時計を見て行動する習慣が身についた。さらに、朝のSHと読書タイムを入れ替えたことで「始業に間に合うように」という意識が向上している。不注意による遅刻者へのルールを厳格化したことで常習的に遅刻をする生徒の割合が減少した。1月20日現在では98日だが、年間を通じた日数では集計を取り始めてから過去最高の無遅刻者の達成日数である。</p> <p>課題：1学期は内灘高校への登校生徒との時間調整で通常よりも30分登校時間が遅く62日達成で達成率86%、9月以降は内灘高校登校がなくなり、登校時間が20分早まったことにより1月31日現在で41%と低下した。</p> <p>改善策：現状の「見える化」を行い、無遅刻者へのアプローチを行う。</p>
<p>学校関係者評価委員の評価</p>	<p>・基本的生活習慣の確立は、人間性育成のために大切な視点であり、また、社会人として必須の能力である。今後も、その向上のために力を尽くしてほしい。</p>			
<p>評価結果を踏まえた今後の改善策</p>	<p>・ルールの厳格化だけでなく、その意義を明確に理解させ、学校全体として基本的生活習慣の向上に努める雰囲気醸成する声掛けを継続していく。</p>			